

ここ数年、テレビ、新聞にはリストラと言う文字が出てこない日が無いほど多用された文字でありました。

多くの人達は、不況の中で企業が生産合理化のためにバサバサ首を切ることだと理解し納得しておる様です。

本来は「リストラクチャリング」であって、不況の中で企業が非採算分野から撤退して、新しい成長分野へと進出することによって、企業の再編、再構築を計ることです。

一つの業種、職業の生命は時代の進化、ニーズと共におよそ30年周期で終わると言われます。

戦後、やがて60年・・・思えば二度目の脱皮時を迎えている訳であります。

業種生命の終わった分野から、新しい成長分野へと言うのは易しいが、転換はなかなか難しく、このハードルを越えるのにはかなりの先見性を持たないとできません。先見性のない合理化は、単なる「首切り」となってしまう、さては社会的不安・・・惹起させてしまいます。

日本の不況は経営者達に先見性が無かったから生まれてしまったと言えるかもしれません。

先見性を養うコツは、周囲に多くの優れた友人、師を持つことであり、交流を通して自分を磨くことです。そして次のリーダーを育てていくことであります。

先日、文部科学省の友人を訪ねて、アカデミアパークの将来像を聞いてみました。

「IT産業は、あとせいぜい10年で終わります。次は、超電動、グラスファイバー、バイオ、そして脳産業が中心になるでしょう。特にバイオと脳ライフサイエンスにかかる産業はこれから50年、世界の産業のトップの座を占めるでしょう。今、文部科学省の巨大な予算がそれを証明しております。是非これを利用してください。」と答えが返ってきました。

また、一方身近な分野では、先日「お台場、六本木」を見学に行って参りました。そこで目にしたものは、人混み、喧騒、刺激的な服装の若者達、氾濫する商品・・・不況とは、別の世界が展開していました。帰路につき、バスがアクアラインを越えて、見えた木更津の海、青田に皆ほっとした顔をされていました。

新しい分野とは、単なる都会のモノマネ、都市化では先見性とは言えないでしょう。

時には古きよきもの、捨てられていた雑魚・規格外の野菜、大自然の香り・・・房総ならではの資源を活用すべきです。

昨年の入り込み調査では、県外から房総へ訪れた人は1億4千万人と発表されました。

都会の喧騒を離れ、ほっとする大自然、新鮮さあふれる農産物、田舎っぺの純朴さ、人の良さがにじみ出るサービスを提供したいものです。

定住人口の25倍の流入人口を黙って見逃さないで下さい。